

Press Book vol.1

1993-2000

kazuyo komoda design

ABITARE



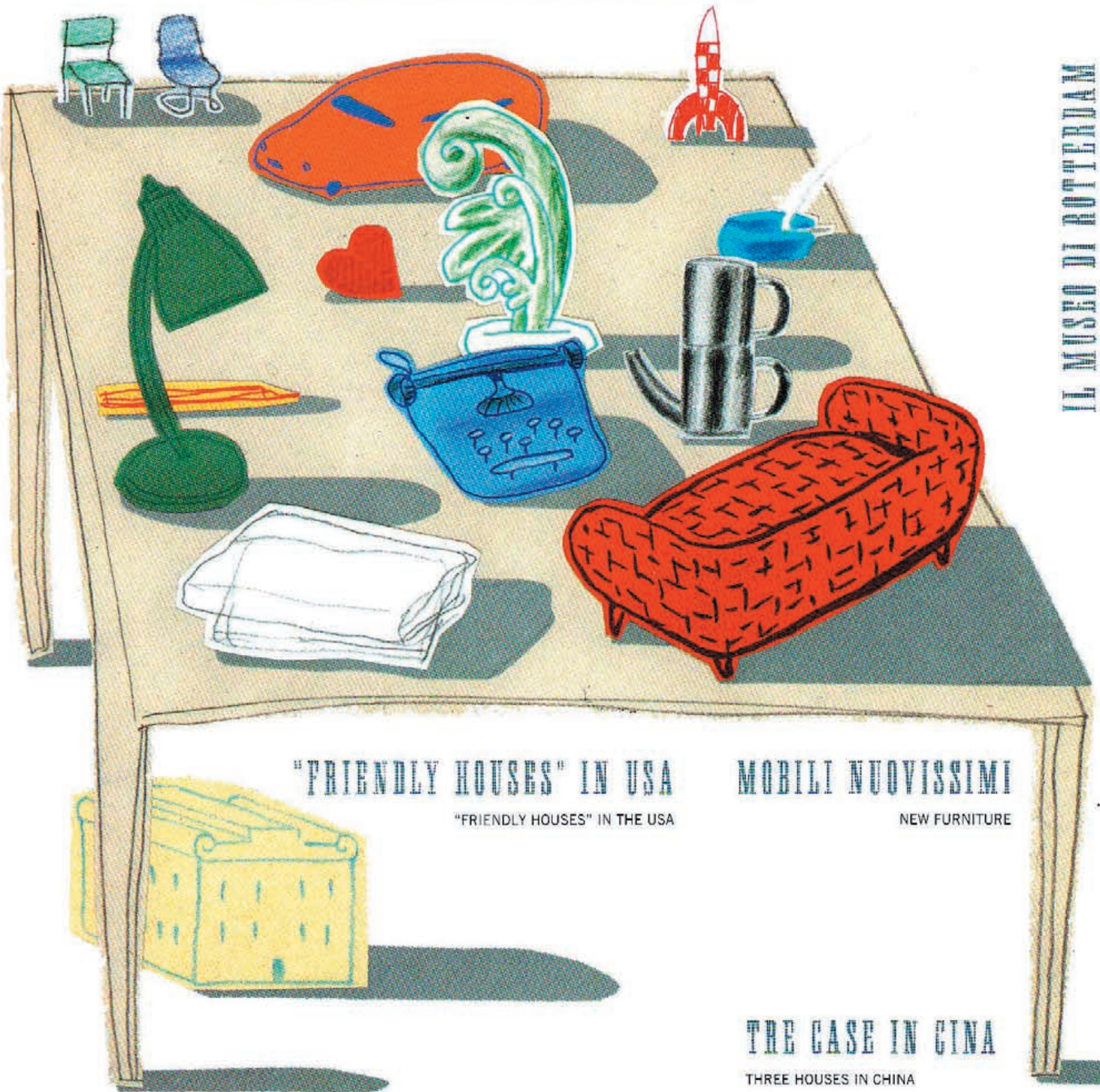
317

Lire 10.000

Prezzo
in Italia

\$ 11.50

Europe
Overseas



"FRIENDLY HOUSES" IN USA

"FRIENDLY HOUSES" IN THE USA

MOBILI NUOVISSIMI

NEW FURNITURE

THE CASE IN CHINA

THREE HOUSES IN CHINA

IL MUSEO DI ROTTERDAM

THE ROTTERDAM MUSEUM

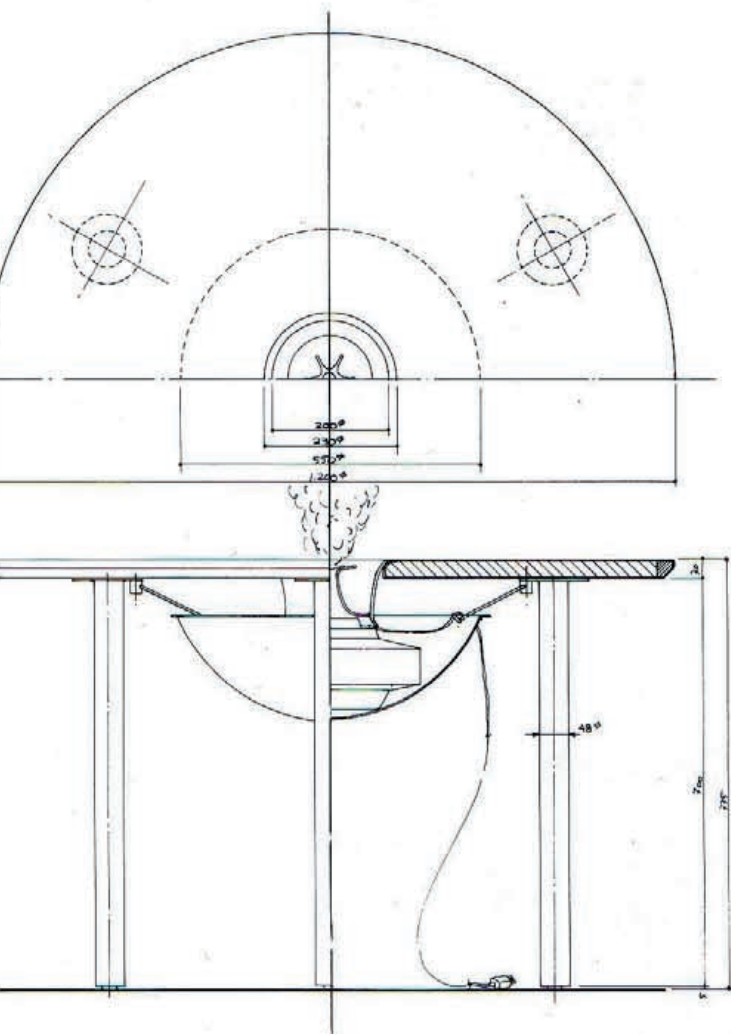
Full text in Italian and English. Zusammenfassung in deutsch.
Revue en français. Resumen en español.

Illustration by ...

Illustration by ...

TAVOLO CON SCALDAVIVANDE
TABLE WITH FOOD WARMER

DOMODINAMICA
GAYSA, DESIGN KAZUYO KOMODA



In tavolo con scaldavivande incorporato, sormontato da una sculturina/vaso in vetro bianco, che conduce il vapore acqueo e ne raccoglie la condensa. Nel disegno esecutivo (in sezione) si distingue il vaporizzatore che funziona da scaldavivande. Presentato in foto nella prima versione a tre gambe, il tavolo ne avrà quattro in quella definitiva. Lo schizzo di Komoda illustra la situazione tipo per cui è pensato l'oggetto. Nel particolare, il piano impiallacciato in legno di pero (è prodotto anche in laminato plastico).

table with built-in food warmer and a white glass sculptured vase that channels steam and collects condensation. The final drawing (in section) shows the vaporiser that acts as a food warmer. The photo shows the initial three-legged version, although the table will have four legs in its final version. Komoda's sketch shows a typical setting for the table. In the detail, the veneered pear-wood top (also available in plastic laminate).



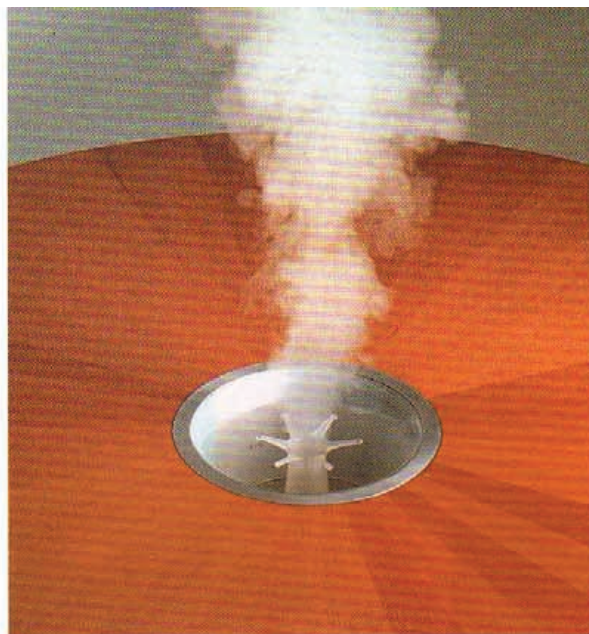
CASA

VOGUE

GIUGNO
1994
N. 263
L. 7.500

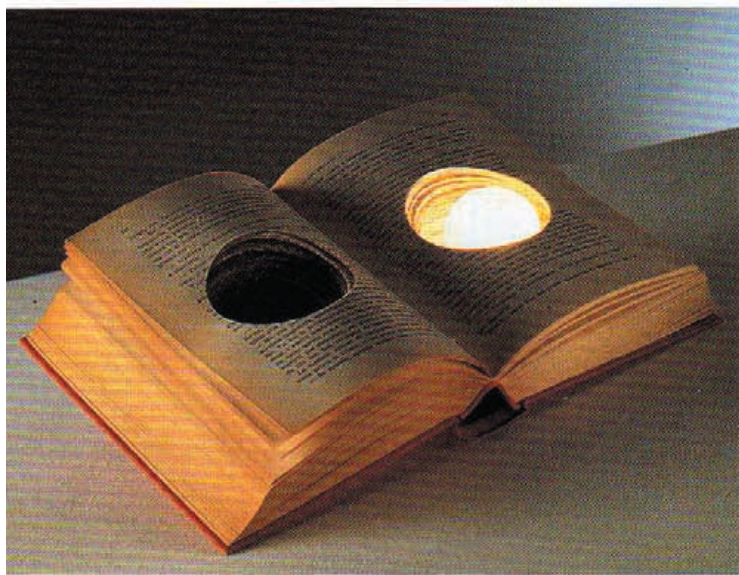
country life:
le più belle case
di campagna

design naturale in ferro
corda e midollino



MIRO ZAGNOLI

Una giapponese a Milano



DAVID ZANARDI

2



MIRO ZAGNOLI

3

“Sono partita dal Giappone per l'Italia nel 1989, dopo aver vinto il secondo premio di un concorso di design presieduto da Aldo Rossi. Volevo restarvi due anni e ne sono passati cinque”. Con voce sommessa Kazuyo Komoda, giovane designer di talento, 32 anni, racconta la sua esperienza a Milano dopo la laurea in Design all'Università di Tokyo. “Penso che in Italia il design possa veramente fondersi con la vita, a differenza del Giappone dove invece è molto staccato dal quotidiano. Forse perché nel mio paese la qualità della vita in generale è più bassa e nello stesso tempo vi sono tante culture diverse, tutte importate, che sono come tanti fiori recisi senza radici. Perciò il design in Giappone è rivolto più all'arredo di ristoranti e negozi e molto meno alle abitazioni private”. Kazuyo Komoda spiega come i suoi progetti siano spesso il frutto di una ricerca di sintesi tra la sua cultura d'origine e la realtà italiana in cui vive. Da questo tipo di approccio nascono oggetti di arredo molto ispirati, che emanano una grazia particolare e un valore simboli-

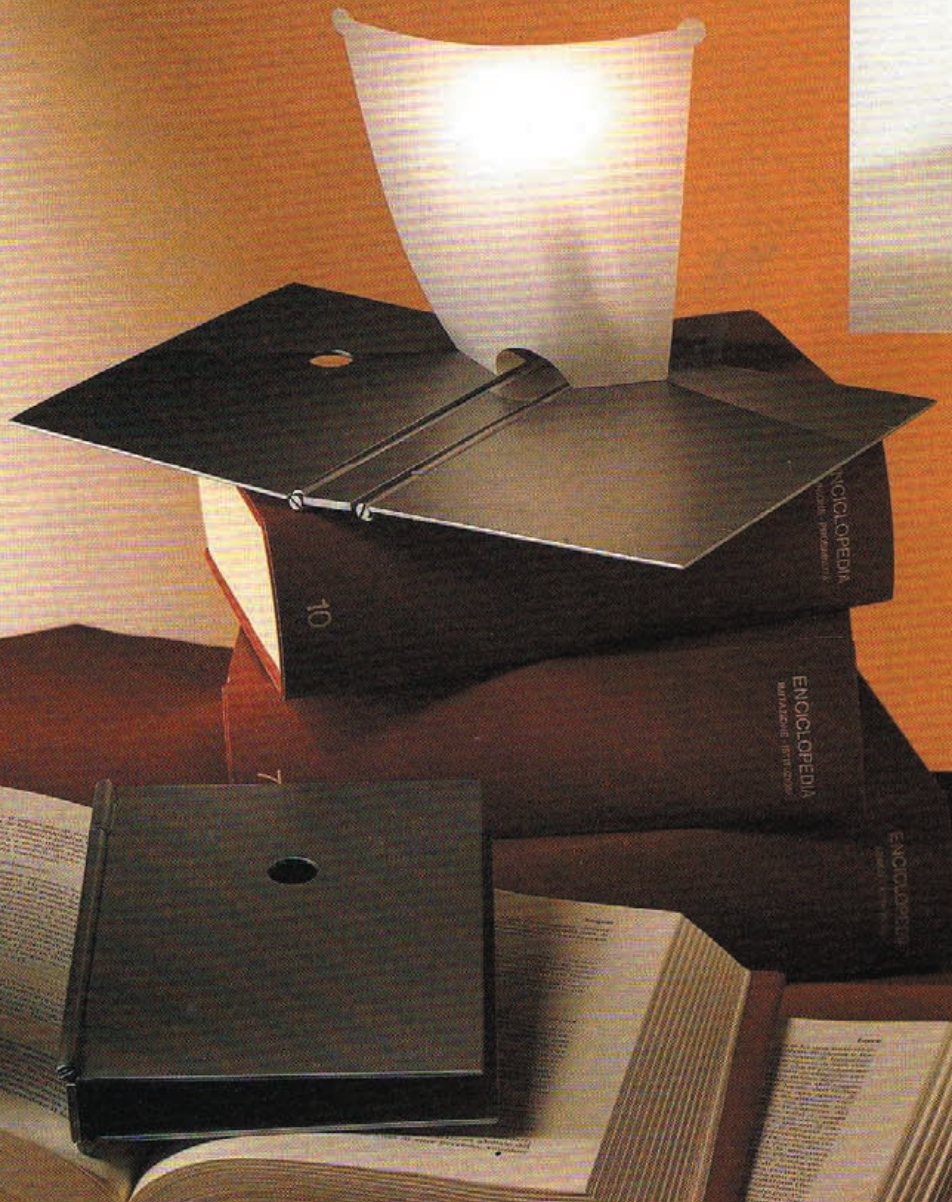
co o evocativo. Come avviene, per esempio, in Gaysa, il tavolino animato da un braciere centrale che diffonde vapore, progettato nel '93 e prodotto da Domodinamica. “Una volta in Giappone si usava cucinare davanti agli ospiti, ora questa usanza è quasi scomparsa. In Italia si usa invitare a pranzo le persone: il vapore rappresenta il simbolo della tavola giapponese e può essere usato come scaldavivande”. Anche nel disegno del Portacandele per vaso di fiori, prodotto da Progetti, Kazuyo dà alla fiamma della candela un valore poetico, trasformando un candeliere in un flessuoso ramo artificiale. I materiali che la designer predilige sono semplici e puri come il legno, il vetro, l'acciaio e il policarbonato in fogli. La sua credenza conica per piatti di tutte le dimensioni, di chiara ispirazione giapponese, è in legno di faggio e policarbonato e, al recente Salone del Mobile, Bernini ne ha presentato il prototipo. Tra le nuove realizzazioni di Kazuyo Komoda non si può dimenticare l'originale lampada Libro da Comodino, un piccolo elemento di illuminazione da appoggio: aprendo la copertina di alluminio, si alza un foglio di policarbonato e la lampada diventa tridimensionale. Attualmente, Kazuyo si occupa della ristrutturazione della Certosa di Avignone, in Francia, con il designer Denis Santachiara. Per ora non ha nessuna intenzione di tornare a vivere nel centro di Tokyo, perché, dice, Milano ha una dimensione molto più umana. Le cose che le mancano di più? “La mia famiglia, i fiori e il vento che a Tokyo c'è quasi tutto l'anno”. *Emanuela Teatini*



GUIDO CHIOVATO RAMBALDO

4

DAVID ZANARDI



- 1-Gaysa, tavolo prodotto da Domodinamica, contiene al centro un braciere utilizzabile come scaldavivande.
- 2-Tra i progetti in attesa di essere prodotti, la curiosa lampada Libro da Comodino.
- 3-Un ritratto di Kazuyo Komoda.
- 4-Portacandele per vaso di fiori prodotto da Progetti.
- 5-Credenza in faggio e policarbonato, il cui prototipo è stato presentato da Bernini.
- 6-L'ultimo progetto: un nuovo Libro da Comodino nel cui interno si nasconde una lampada.

6

INTERNI

LA RIVISTA DELL'ARREDAMENTO

441

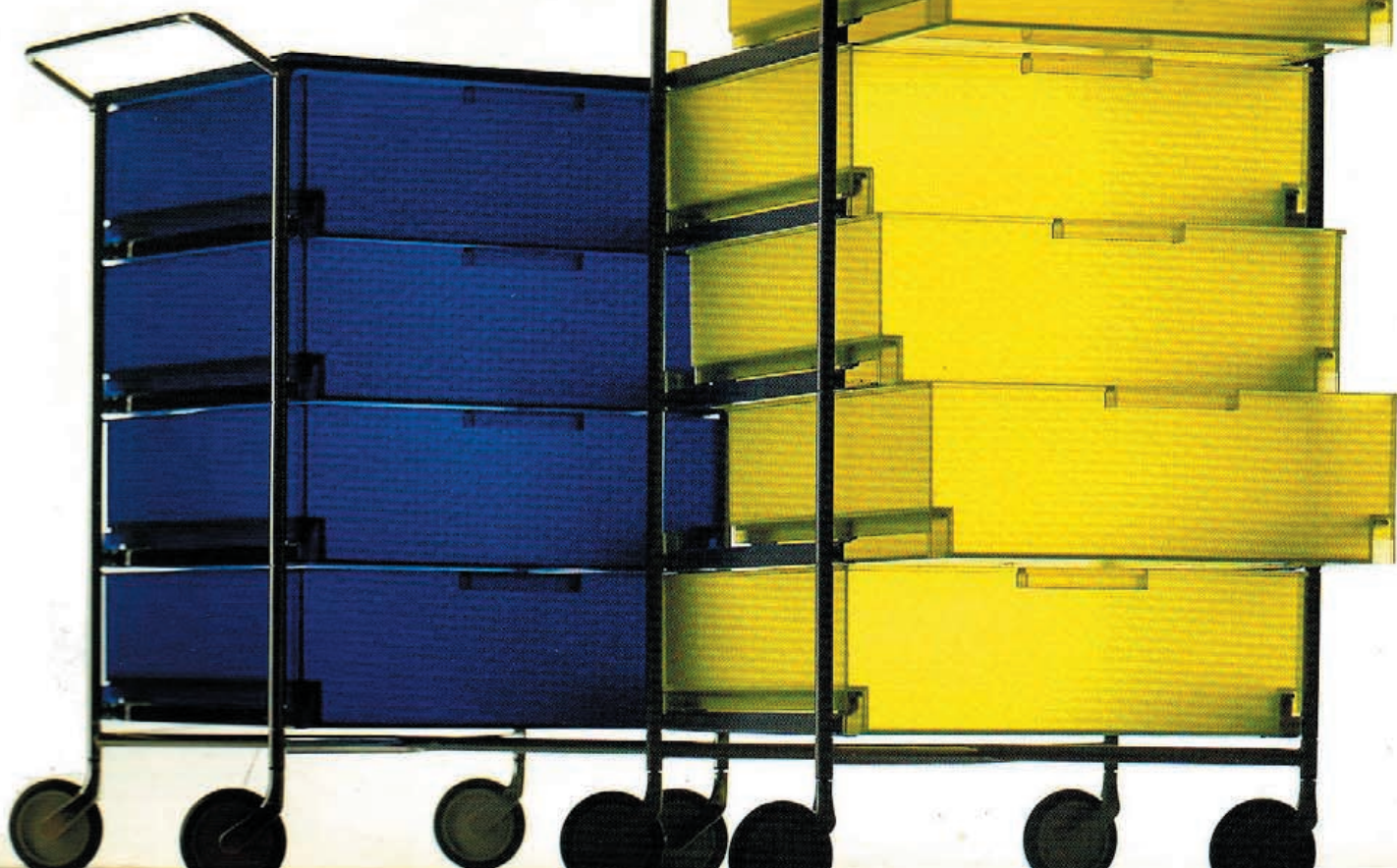
GIUGNO 1994


CASE MEDITERRANEE

**SHAKERS:
LA VITA E I MOBILI**

**I CONTENITORI
POLIVALENTI**

**MINI-ARREDI
PER FRUITORI IN ERBA**





Di forma insolita, Kasumi è nato per riporre un intero servizio da tavola, ma è anche utilizzabile come espositore per negozi. È realizzato da Bernini, con struttura in pero e alluminio e anta in policarbonato trasparente e traslucido. È disegnato da Kazuyo Komoda.



特集:

プレゼンス・マーケティング

モノの存在感を表現するのは
街角と店頭だ

特別レポート:

海外旅行2,000万人時代を
高笑いできない旅行業界

〈好評連載〉

トレンド'96

最新カラオケ事情

“知っているも歌えないヒット曲”

ヒット・キャンペーンを追う

カルピス食品工業

“味わいカルピス”

ロングセラー商品学

金鳥蚊取線香

'96TCC賞入賞作品紹介



世界で活躍する日本人デザイナー 式



プロダクトデザイナー/
インテリアデザイナー
菰田和世 プロフィール

1961年、東京に生まれる。武蔵野美術短期大学プロダクトデザイン科卒。カワイ照明(株)デザイン室、(株)ジ・エアードザインスタジオを経て、1989年渡伊。スタジオサンタキアラに勤務後、フリーランス。おもな仕事にはドモディオミカ社、ベルニーニ社のための家具、プロジェクティ社、オジェッティラティエリ社のためのインテリア小物などがあり、また照明器具、携帯電話、カラーリング、コンサルタントなど活動の幅は広い。彼女自身および作品は、イタリア、ドイツをはじめ各国の新聞雑誌などに多数紹介されている。「ジャパニーズライト」展(フランクフルト、デュッセルドルフ)、「デザインとメタルフォーゼ」展(ロンドン)、「MU」展(バルマ)、「ライティングドメスティック」展(東京)、「ジャパニーズデザイナー」展(ミラノ)、「アトモスフェアを魅惑する12人のデザイナー」展(ミラノ)など幾多の展覧会に出品。YCS横浜クリエーションスクエア—講演会講師。1983年YATAIムーバブルアーキテクチャー—設計競技2位入賞。



まり、イタリアは、この職人に頼るところが大きく、多種少量生産に適した社会や企業構造の背景が如実に現われている。

これは、菰田和世の執筆したものである。ポルディズムのデザイナーとして知られるパッパ・ファチェンテの言葉のごとく、まさしく“イタリアは、工業化社会ではなく職人化社会である”と言えよう。

では、文化の視点に立ってデザインをとらえるとうか。

それは、端的に語ることは不可

カタチのないデザイン—

菰田和世は、時代が

必要とする●

アクターかもしれない

コラボレーター/コピーライター
泉野正人

イタリアの土壌に デザインの本質がある

イタリアは、一周遅れのトップランナーである。これは菰田和世がJETROに執筆した『ネバーエンディング・イタリアンデザインの背景』の冒頭で引用した、在伊日本人デザイナーの発言である。

イタリアがデザイン王国として、常に世界から注目される要因を考えると、多数のフリーランスデザイナーがそれぞれ個性的な仕事をしている、という点に関係する。

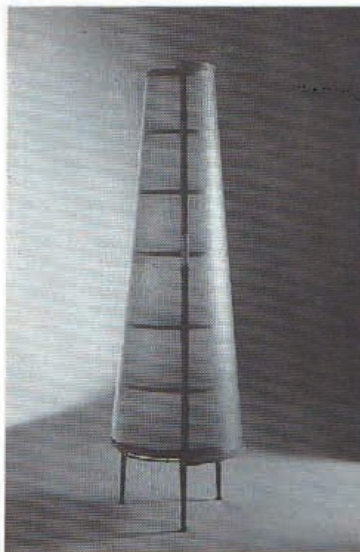
ここでは、デザイナーが単に商品というより「文化」の角度からグローバルな視野に立って仕事をするといった背景と、ミラノトリエンナーレや各地の見本市開催など、文化企画でのプライベートな研究テーマを発展させ、発表する「機会」に恵まれているという背景にある、と菰田和世は述べている。

また彼女は、95年YCS(横浜クリエーションスクエア)におけるデ

ザインライブラリーに講師として呼ばれている。それは、おもに大企業のインハウスデザイナーのための講演であり、そこでもメーカーおよびマーケットの質のちがいについて語っている。

イタリアでは、日本のように社会状況や流行が急変せず、安定したライフスタイルを持った西欧のマーケットをおもなターゲットとする。そのため販売方法は大きく日本と異なる。日本企業における営業が第一線に立つスタンスとはちがい、イタリア企業は、通常イタリアやヨーロッパ各地の見本市に出展し、客の反応や受注の数により生産の是非や量を検討する。新製品に関しても、たとえオーナーの判断に誤りがあっても補正がききやすく、メーカーのリスクも少ない。

そして、何より工場を持たない企業の製造面において、さまざまな分野のデザインを支えているのは、層の厚い職人たちである。つ

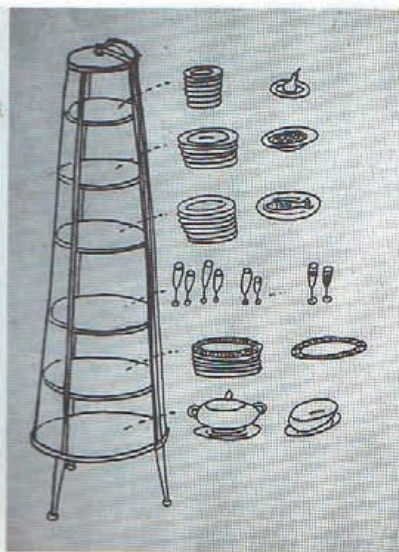


「KASUMI」
photo: David Zanardi

能で、まずヨーロッパの中のデザインの起源に触れておく必要がある。

ローマ帝国が築かれた時代の人が移動していった街。そこは、すべて重要文化都市になっている。それは、邸宅に始まり、長い歴史をかけて行なわれた都市計画でわかる。

特に、中世。イタリアが最も輝かしく、華やいだ時期。当時のお



金持は、自分たちの家だけでは飽き足らず、広場まで美しくしようとする、“広場は自分たちの応接間”という概念が生まれた。このイタリア人の気質は、デザイン文化の正統な技として、いまなお受け継がれている。

ゆえに、イタリアのデザインは建築家によるものが多い。だから、建築家が椅子やバッグをつくるのは決して珍しくない。パリやロンドンの建築家の中にも、そういった者も多いそうだが、それはあく



「GAYSA」 photo: Miro Zagnoli

まで今日的傾向でしかあらず、建築の概念がすべてのデザインに影響を及ぼすのは、イタリアのみ。

菰田和世の兄も建築家なので、その影響か、彼女は無理なくイタリアのデザイン土壤に溶け込めている。

たとえば、名古屋のデザイン博の機会に開かれた〈株〉ユニー主催 YATAI (屋台) ムーブブルアーキテクチャー (展覧会) では、世界の著名建築家12人の招待作家のほかに、公開設計競技の上位3名を加えたプロジェクトが実施された。菰田和世は、渡伊直前に参加したこのコンペですでに2位入賞という実績を残している。

この設計コンペでは、①飲み物を提供する屋台②人形劇のための屋台③大道芸人のための屋台、と3つのテーマに分かれており、菰田和世は、③の「大道芸人……」に好奇心とイマジネーションがかき立てられたという。

分野としては空間デザインとも言えるが、これはむしろ動く“建築”としての屋台ととらえるほうが、正しい。いずれにしろ、舞台のないところに大道芸人が登場するだけで、そこは舞台と化し、いなくなるとまた元に戻る。これこそまさしく“かたちのないデザイン”の観点に立った、光や空間へのアプローチである。ここに、デザインの本質があるように思う。

前回は、伊藤セツのインダストリアルデザインの視点からプロダクトにおけるかたちの探求を追ったが、この章では、おもに菰田和世の専門分野、プロダクトおよびインテリアデザインにおけるユニ

ークなコンセプトを紹介する。

デザインには必ず act が生じる

モノとヒトのかかわりには personal が生まれる。もちろん、ターゲットはおもにモノであるが、その両方の生活事象の掛合せて“その人らしさ”は確立される。

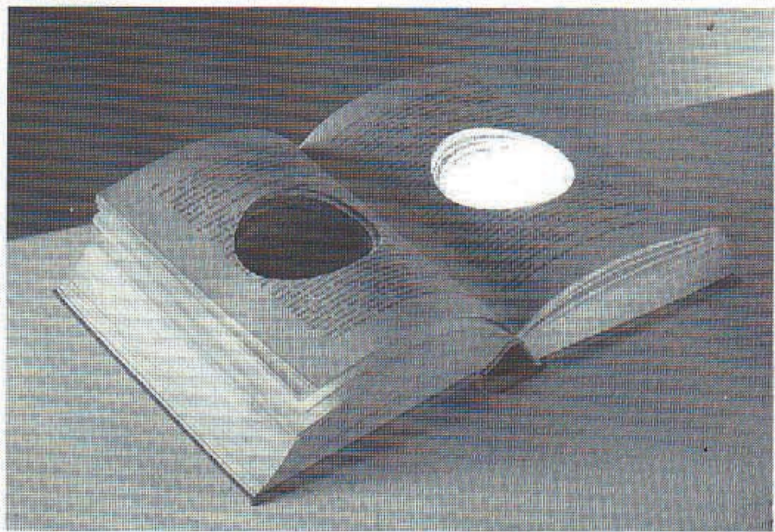
そういった、いろいろなスタイルを持つ人のさまざまなシーンを act と規定できる。そこには当然マーケティング戦略があり、科学的な素材の研究開発がある。そして、世に出る。

菰田和世は、デザイナーであるが1人の生活者でもある。彼女はそのことをきちんと意識しているので、生活者としての確かな目とデザイナーとしてのすぐれた“技術”が備わっている。

たとえば、ベルニーニ社が94年に発表した食器棚「カスミ」は、素材の美観と技術的な特性をフルに生かしている。これは、ヨーロッパ市場にはかつてなかった画期的な作品である。欧米では、通常食器セットは、フルーツ皿から大皿までの各タイプのサイズがほぼ決まっていますが、日本のように和・洋・中といったバリエーションはなく合理的である。

そこで、彼女は、それぞれの皿の大きさに合わせた棚板をつなぎ合わせ、円すい台形の構造体で構成した。

新鮮なのは、この構造体と回転式扉を包み込むように被ってあるマクロフォールというポリカーボネートフィルムである。これは本来、サイン（看板など）に使用す
イラスト：Kei

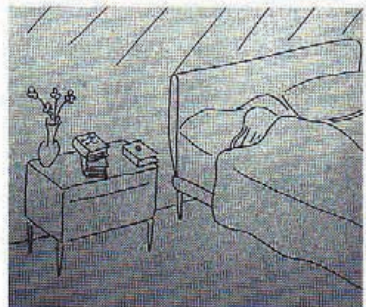
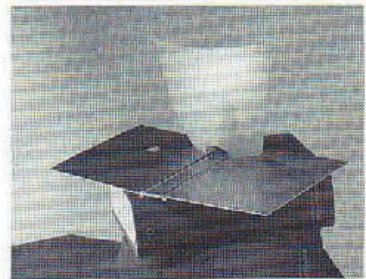
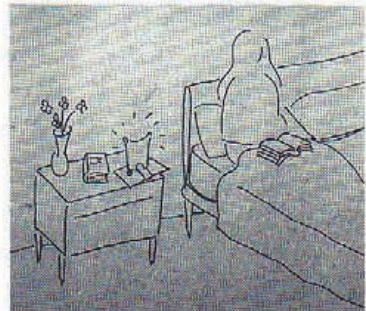


「LIBRO DA COMODINO」
photo: David Zanardi

るもので、カーボンとプラスチックの混ざったシートとさえご理解いただけるかと思う。

このシートの使用により、スタンプ（型）なしで、曲面の加工をすることに成功し、コストダウンを図ったうえ、その素材の軽さが視覚的にも軽快感を醸し出している。つまり、製造上の工程の簡易化および美的なオリジナリティを同時に導き出したソリューションと言える。これはまさしく発見である。この素材を世界でいちばん最初に、家具に使用したのは菰田和世である。

彼女は、ミラノに来て初めの2～3年、イタリアと日本の文化の“ズレ”のようなものを不思議に感じていたと言う。たとえば、“テーブルの概念”。日本では団らんの場ととらえるが、イタリアでは、テーブルでのコミュニケーションのあり方も日本とは大きく異なる。そこに集まる人も、食事の仕方も、そして討論も、生活の中の一家具、テーブルの場を意義あ



るものとして重視する。

そこで考えたのが、テーブル「カイザー」。これは、長時間にわたるディナーのために、蒸気式

料理保温機能を備えている。テーブルと湯気というイメージ上での結びつきと機能面を双方クリアしている。このような菰田和世の視点は、単に利便性だけでなく、新しい生活文化への提案として、ヨーロッパを中心に高い評価を受けた。

菰田和世の、コンセプトを解き明かせば、大きく分けて3つ。

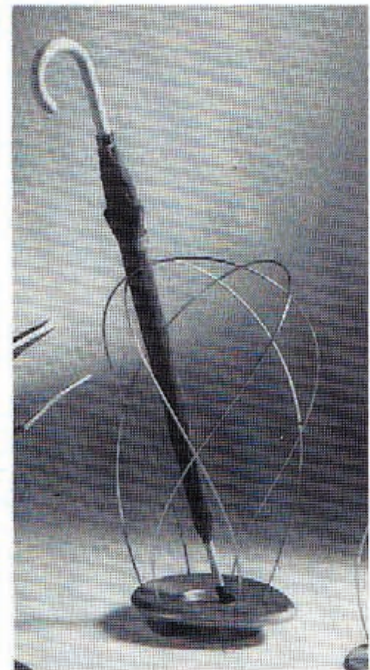
- ①ベーシックなワークスタイルと発見からの応用：豊富な技術上の知識をベースに美観、構造、製造上の各種の問題の再解決に臨むことにより、かつてなかったプロダクトをデザインするよう研究し続ける。素材の特性や構造の可能性の再発見や応用によりオリジナリティの高いプロジェクトを行なう。
- ②ライフクオリティの向上：生活のクオリティを上げるためにさまざまな可能性、相手を再検証していく。
- ③モノへの普遍性の授与：ヒトとモノの心理的な関係を重視し、①と②に、エッセンスとして加える行為を探る。

つまり、彼女は、まるで、“空

間にある交差点”をクリエイトするマジシャンのごとく、何らかの解決法を見つける。それは、作品すべてに反映されており、「リプロダ コモディーノ」や「アザミ」においても言える。

花を活けたり、本を読んだり、といった日常生活の“行為”という習慣の中で存在するモノとヒトとのコミュニケーションに着目。多くの人が共通しているさまざまな記憶の蓄積を利用して、モノとヒトとのあいだで生まれる詩的な関係を新しいプロダクトの中に取り入れるといった実験をもの見事に実現している。

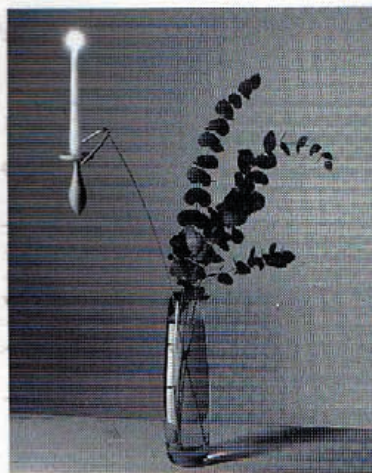
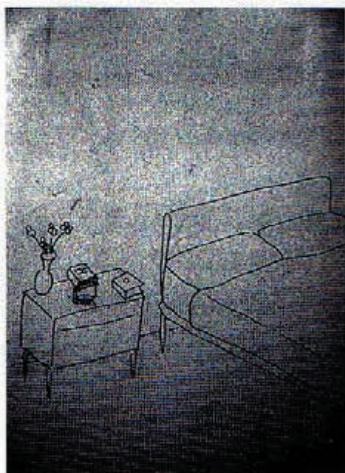
たとえば、「リプロダ コモディーノ」（ナイトテーブルのための本の意）は、寝る前の読書の習慣からヒントを得ているユニークな照明器具。本を閉じ、明かりを消し、そして眠りにつくという、過去、幾千回となく繰り返された動作の中で、本を閉じるという行為と明かりを消す行為を結びつけるため、本型のランプの表紙を閉じると明かりも消える仕組みになっている。



「AIKO」

真のデザインが求める視点。それは、菰田和世のようなコンセプトなのかもしれない。

デザインの語源は、もともと企画・計画を意味する。しからば、表現の本質は問題解決力にありということか。



「ASAMI」

(いずの・まさと)



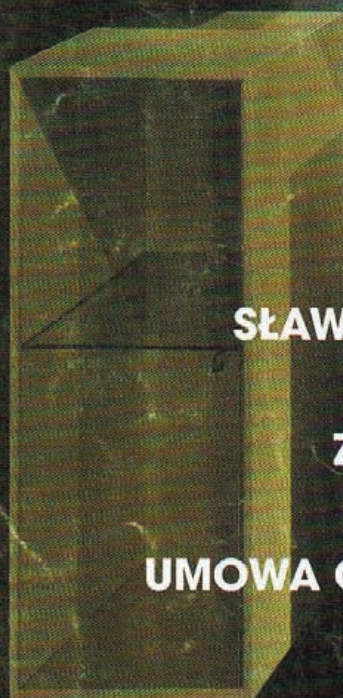
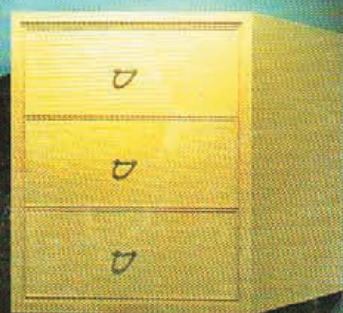
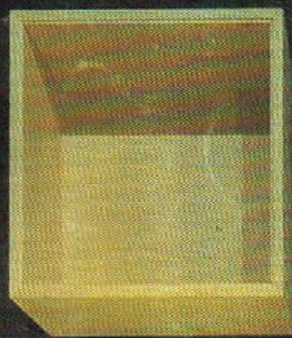
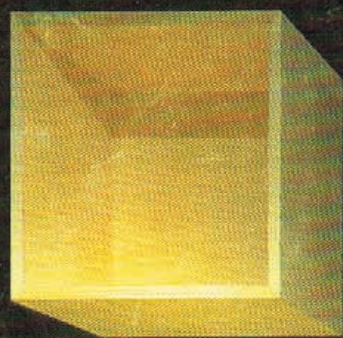
marzec 1997 nr 1 (13)

dom **i** BIURO

CZŁOWIEK

WZORNICTWO

ARCHITEKTURA



SŁAWY MEDIOLAŃSKIEGO DESIGNU

ZABAWA Z PRZEDMIOTAMI

UMOWA CZY CYROGRAF: PORADY PRAWNE

DODATEK DO BUSINESSMAN MAGAZINE

BUSINESSMAN

Kazuyo Komoda

Byłoby dużą niesprawiedliwością pominąć fakt, że mediolański design tworzą nie tylko rodowici Włosi i nie wspomnieć o takich projektantach, jak E. Sottsass, G. Sothen czy W. Sawaya, którzy przybyli do Mediolanu z różnych stron świata, zdobyli tu jednak znaczącą pozycję i do dzisiaj zachowali wpływ.

Jednym z tych niewłóskich mediolańskich projektantów jest Japonka Kazuyo Komoda. Wcześniej pracowała w biurze Santachiary, od niedawna podąża własną drogą. Zaproszona przez byłego pryncypała, wzięła udział w projektach ART'OTEL w Dreźnie i New Persona podczas Biennale di Firenze. Choć jej twórczość pozostaje pod wyraźnym wpływem Santachiary, posiada też cechy indywidualne. Jest kobieta i poetycka.

Zaprojektowany przez nią lichter Asami (Kazuyo często nadaje



19

swaim obiektom imiona japońskich kobiet) może być elementem swobodnych aranżacji, tak jak ta, którą tu pokazujemy - w wazonie na kwiaty. Główna część: świecznika,

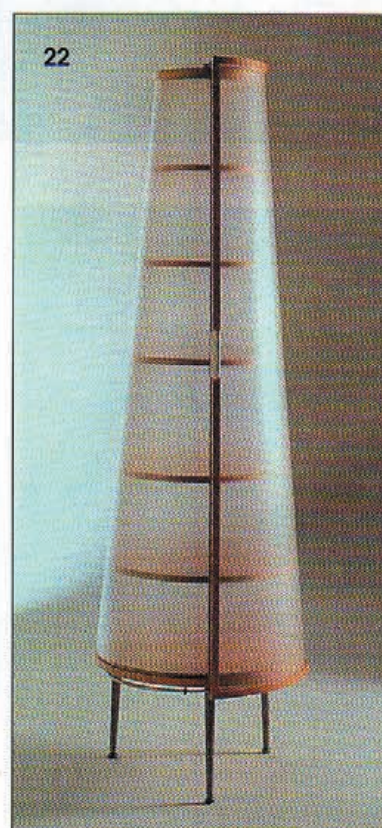
tak zrównoważona, by mogła stałe zachowywać pionową pozycję i sprężyste, cienki pręt dają się umieścić w wazonie pod dowolnym kątem. Na dotknięcie lichter



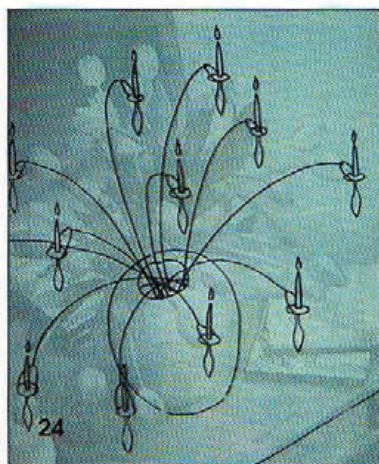
20



21



22



19. Kazuyo Komoda.
 20. Aiko, stojak na parasole i gazety, 1995.
 Projekt: K. Komoda. Fot. D. Zanardi.
 21, 22. Kasumi, kredens, 1993.
 Projekt: K. Komoda. Fot. D. Zanardi.
 23-25. Asami, świecznik, 1993.
 Projekt: K. Komoda. Fot. Ch. Rambaldo.
 26, 27. Libro da Comodino, lampka nocna,
 1994. Projekt: K. Komoda. Fot. D. Zanardi.
 28. Gaysa, stół z nawilżaczem powietrza, 1993.
 Projekt: K. Komoda. Fot. M. Zagnoli.



reaguje sprężystym ruchem. Tej tajemniczej równowadze zawdzięcza Asami niepowtarzalny wyraz, a także sukces komercyjny. Świecznik pojawił się już w jednej z warszawskich galerii.

Podobnie elegancją, płynną linią odznacza się Aiko - stojak na parasole i gazety. Dobrze komponuje się z meblami o bardzo lekkich formach.

W nocnej lampce - Libro da Comodino - możemy dostrzec bez trudu wpływ designu Santachiary, z jego narzucającym się symbolizmem i skłonnością do komizmu.

I wreszcie Gaysa - stół śniadaniowy z nawilżaczem powietrza pośrodku, zaprojektowany dla firmy DOMODINAMICA. Czysta radość dla oczu.



Akamine Hidetoshi

ABITARE

A

371

Bilbao

Los Angeles

Full text in English

**Due musei per due città:
Gehry a Bilbao, Meier a Los Angeles
Sette case sopra e sotto
Design da Colonia e Fashion Design
Rassegna produzione: sanitari e rubinetti**

**Two museums for two cities:
Gehry in Bilbao, Meier in Los Angeles
Seven up-and-down homes
Cologne Design and Fashion Design
Production survey: sanitary ware and taps**

MARZO/MARCH '98 LIRE 12.000 \$12.



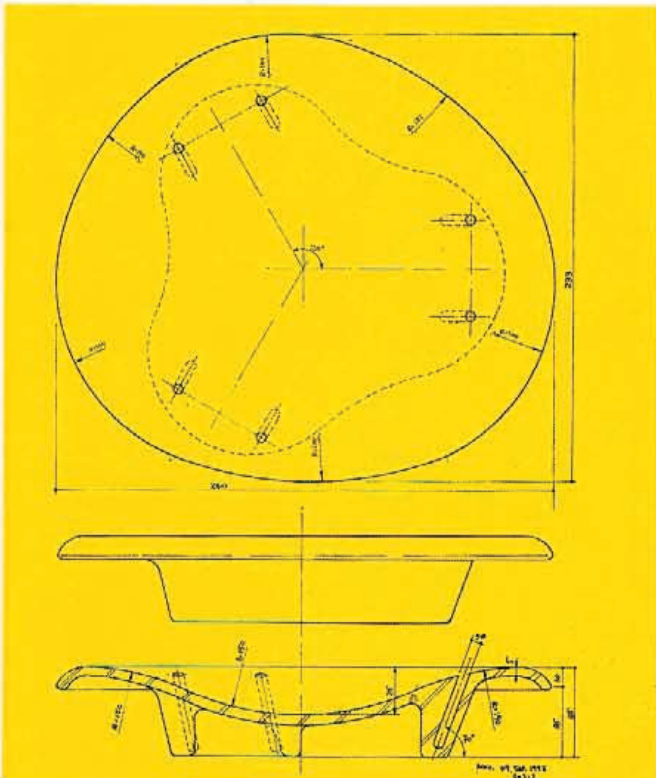
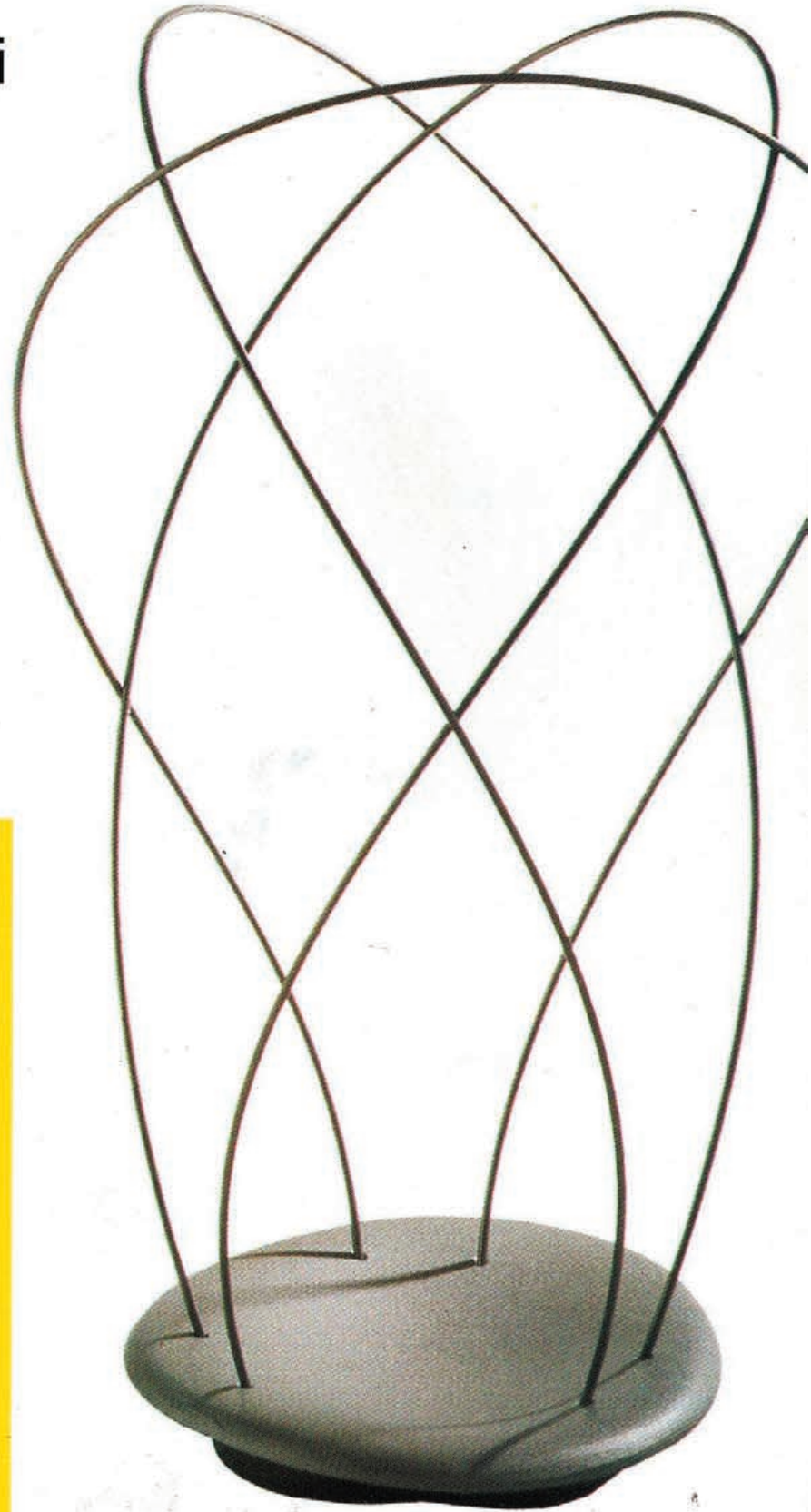
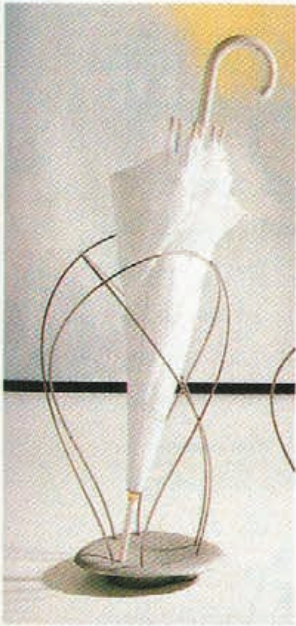
Portaombrelli con base di fusione di alluminio opaco
in cui si inseriscono tre fili di acciaio armonico inossidabile
precurvati. Dimensioni: diametro cm 35, altezza cm 60.

*Umbrella-stand with a matt cast aluminium base
and three harmonic stainless steel rods.*

100% rustproof. Diameter 35 cm, height 60 cm.

kazuyo komoda asisai

morphos/acerbis international



1998年10月1日発行 創刊号1冊1日 1997年12月12日第三種郵便物認可

AXIS

9

September
1998
October

10



Designing MUSEUMS

FEATURE ミュージアム新世紀 COVER INTERVIEW ジャン・ヌーベル 建築家

vol.75

国内・海外、インハウス・フリーランスなど、ジャンルを問わず、

さまざまな分野で活躍するクリエイターの作品の制作にまつわるエピソードや最近の活動を紹介します。

Here we have creators active in various fields freely talk about episodes related to their works and recent activities.



Photo/ David Zanardi

Candle Stick "Jigsaw," d.House Collection, DRIADE



菰田和世

Kazuyo Komoda Designer

1961年東京都生まれ。武蔵野美術短期大学卒業後、カワイ照明、ジ・エアーデザインスタジオを経て、89年渡伊。スタジオ サンタキアラに勤務後、フリーランスとしてミラノを拠点に活動。ドリアダ社、ローゼンタール社の製品をはじめ、インテリアデザイン、家具、小物、文具等のプロダクトデザインを中心にカラーリング、ブランド・コンセプトメイキングまで、活動範囲は多岐にわたる。

Born in Tokyo in 1961 and studied at the Musashino College of Art. She started her career in industrial and interior design in 1982. Since 1989 has worked in Milan. After collaboration with Denis Santachiara she established her own design studio in Milan. She works for ACERBIS INTERNATIONAL, DRIADE, NEC, Rosenthal and Giorgio Pizzutti, among others.

4月のミラノサローネで発表した傘立て「ASISAI(あじさい)」でBIO 16入選と、ヤング&デザイン賞2位をいただいた。ステンレスのバネ鋼をベースの穴に差し込み、その緊張から生まれる自然な曲線を利用し、傘立て、マガジンラック、コートハンガー等に展開可能なシステムを制作し、95年に展覧会に出展したものに改良を加えた。製品化までには時間がかかったが、造形しすぎず素材の潜在的可能性を活かし、物と空間に互換性を持たせるという意味では成功した例だと思う。

今年はなぜかあかりに関わる仕事が多い。10月の新宿オゾンでの「AKARI」展にも出品する。製品では、イタリア、日本、ドイツ、スイスと国籍も傾向もまったく異なるメーカーのための照明器具、キャンドルスタンド等のデザインを現在進めている。当然、私のデザイン提案は物と環境だけではなく、製品と企業の背景にも互換性を持たすべく状況に応じて変化するわけだが、自己表現ということに興味の薄らいだ今、洞察、解釈、発展という各過程は、より正確さを要求されるということを再認識している。



Umbrella Stand "ASISAI," Morphos Collection, ACERBIS INTERNATIONAL

My umbrella stand "ASISAI" presented at the Milano Salone in April received the 2nd prize at the Young & Design Awards and selected BIO 16. It's an improved version of the piece I presented at an exhibition in 1995 as a system that could be assembled into different forms such as an umbrella stand, magazine rack or a coat hanger, utilizing spontaneous curves created by inserting stainless steel spring rods into the base structure.

My design proposals change according to the situation so that they create compatibility not only between an object and its environment but also between a product and its corporate background. Now that I have lost interest in self-expression, I am trying to reconfirm the fact greater precision is required in each of the processes of discernment, interpretation and development.

Fax : +39 02-6671-3655

i n t e r i o r m a g a z i n e

comfort

季刊インテリア・マガジン **コンフォルト**

1998年1月5日発行(季刊1・4・7・10月各月5日発行)

No. 1998 winter

31

間取りからの開放

特集

空間のやわらかな区分 益子義弘
オープンな空間で自由に暮らす
家をシンプルな箱としてとらえる

間取りを考え直しはじめたころ 植
フレキシブルに住む、これからの集

【海外取材】ミラノのクオリティ・オブ・デザイン

【新連載】1脚の椅子・その背景 島崎信

ルーマニア辺境滞在記 乳井政幸

巻末付録 室内空間を間仕切る 監修 財満やえ子

木製建具の基本知

C O N T E M P L A T I N G R O O M L A Y O U T





まっすぐに、ていねいに言葉を選びながらインタビューに応じてくれた菺田さん。優しくも自信に満ちた凛とした表情が印象的だった。

今、デザインが楽しい。 自分のやりたかったことを実現しているから 菺田和世

一角獣をイメージしたシュガーポット「MIMI」DRIADE社。スプーンが砂糖の中に埋もれてしまうのを解消。さっしり閉まるふたで、簡単にとりはずせるスプーンはとても機能的。クリアなボディは量も一目でわかる。ガラスと砂糖のきれいな質感も楽しめる。

73ページ/花瓶に差して使うキャンドルスタンド「ASAMI」PROGETTI社。大好きな花とキャンドルを組み合わせたという。全体を支えつつキャンドルの重さによってカーブが微妙に変わるワイヤー、キャンドルの均衡を保つバランスなど、水面下の緻密な計算によるデザインでもある。花の持つ明るさと、キャンドルの光がオーバーラップして美しい。



ミラノで、身近な生活に関わるモノのプロダクトデザイン、そして空間デザインから内装まで幅広く仕事をしている菺田和世さん。自宅兼アトリエのドアを開けると、傘立て、テーブル、食器棚が目に見える。温もりと愛くるしさを感じさせて、存在を主張している。そこへ穏やかな笑顔で菺田さんが現われ、そのモノたちが、自分のデザインであることを話してくれた。それらはまさに、菺田さんの雰囲気そのもののように思えた。

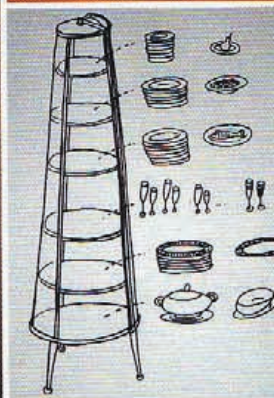
高校の美術部時代から陶芸に興味を持った菺田さんは、武蔵野美術短期大学で工業デザインを専攻した。しかし、単一の素材にこだわらざるをえない工業は自分には向いていないのでは、と感じ始める。「その頃から、プロダクトデザインに興味に向いていったように思います。就職をひかえて、絶対にデザイナーとして働きたいと思っていました。でも当時、短大を出てデザイナーとして就職するのは、

ものすごく難しかったです。運よくというか、小さい会社ではあったけれど、照明器具の会社にデザイナーの求人を見つけて、そこに就職しました」

デザイナー室でただ一人の女性。下町の小さな工場にも足しげく通い、生産加工技術の知識を養った。その時しっかり学んだことが今でも役に立っている、と振り返る。

「その会社には3年間勤めました。仕事をしていくうちに、照明というのは光であって、器具の形ではない、と思い始めて、それならば、空間からのアプローチが必要なんじゃないか、と考えたのです。日本では、建築とデザインが別々に行なわれることが多いのですが、モノから空間まで手がけているデザイン事務所に入りたいと思って、ジ・エアードesignス

自宅ダイニング。愛用のテーブル「GAYSA」(DOMODINAMICA社)と食器棚「KASUMI」(BERNINI社)はご自身のデザイン。「GAYSA」は、右上写真のように中央から蒸気がでてくるといふもの。家族や友人との団欒を大切にしている西洋に、東洋の食事の仕方をミックスしたという。「KASUMI」は、西洋の食器は種類や大きさが張られていることにヒントを得たもの。右下がそのアイデアスケッチ。



タジオに移ったんです」

ここで、デザインのアプローチの仕方など方法論的なことを学んだという。製図などのテクニクはもちろん、技術的な知識、オリジナリティにも自信が付き、その時点で独立も考えた。しかしその前に、違う場所でも違う視点のデザインを見てみようと思っ、それが27歳の時だった。

熱意がサンタキアらの「コラボレート」につながった

とはいえ、菺田さんはあてもなくいきなり日本を離れるようなことはしなかった。まずは、当時既にミラノで活躍していたデザイナーのデニス・サンタキアラに手紙を書き、ポートフォリオと一緒に送ってみた。

「ちょうど講演会に来てみることにしたいんです。その時会いましょう」という返事がありました。それで、会って話をしたら、では、1年くらいミラノに来てみたら、ということになったのです。その時すでにイタリア語を1年半くらい習っていたのですが、彼と話してみると、あの手紙は本当にあなたが書いたのですか?と驚かれました(笑)。ようやく意思の疎通ができるくらいの会話力だったと思います」

その時、確認するかのようにはず聞かれたことがある。

「君はヨーロッパに来たいのか、それともイタリアに来たいのか、それとも僕と仕事したいのか?」

もちろん即答した。

「あなたと仕事がしたいのです。」

実際に彼の事務所働いてみると、本当にたくさんさんのポートフォリオが世界中から送られてくることに驚いた。当然、べつとどうして私を雇ったのだろうか、という疑問がわいてくる。ある時彼にそのことを聞いてみた。

「私の手紙に、なぜ? どうして? 彼と仕事をしたいのか、ということがシンプルに率直に書かれていて、その思いがひしひし伝わってきたそうです」

彼とのマン・ツー・マンのデザインワークは、1年の予定が結局3年間続いた。今までは学んだことは全く違うアプローチの仕方がおもしろかった、という。

「日本ではデザインのための情報集めに時間をかけるので、実際に自分のデザインにたどり着くまでには相当な時間がかかってしまう。過去の情報に頼るところがあるように思うんです。

でも彼はそんなことをポーンと乗り越えてしまう。自己規制からの飛躍を簡単にやってみよう、というか……。雑誌なんかもほとんど見ないし。これには驚きましたね」

彼のところで仕事がしたい、と考えたのは、彼のデザイン概念にオリジナリティの高さを感じたからだ、という。日本では物質的な完成度を偏重する傾向があるのでサンタキアラのデザインは理解されにくい、イタリアをはじめヨーロッパでは高い評価を受けていた。

「テクノロジーを使っても人間的なアプローチがなされていて、ハードウェアとソフトウェアがうまく融合されている。大げさな理論を展開するといったインテリジェントなエッセンスなしに、実際のプロジェクトで人のしないことをしていると、真にインテリジェントのあるデザイナーだと感じました。

明晰な理論家アンドレア・ブランツィやアキレ・カステリオリも違った角度から尊敬しているデザイナーたちですが、コラボレートするならば年令の近い、これからもっともっと仕事をしたいという人の方がおもしろいと思ったんです」



上/ビニール素材のフォトスタンド「PHOTOGENIA」GIORGIO PIZZITUTTI社。現在、イタリアのインテリア雑誌「ABITAR」の予約贈呈プレゼントに使われている。シートを丸めてボタンを留めるだけのシンプルさ。パッケージも平らでコンパクト（5ページ参照）。下/自宅でも使われていた傘立てはステンレスのワイヤーをベースの穴に差し込んであるだけ。ワイヤーのテンションだけで支えており、穴を変えればマガジンラックにもなる。



ミラノのクオリティオブデザイン
Quality of design in MILANO

こもだ・かずよ
1961年東京生まれ。武蔵野美術短期大学工芸デザイン科卒業後、カワイ照明デザイン室、ジ・エアーデザインスタジオを経て1989年渡伊。スタジオ サンタキアラに勤務後、フリーランスとして独立。現在、DRIADE社、PROGETTI社、BERNINI社、DOMODIN-AMICA社などのインテリア小物、家具デザインを手がける。展覧会多数。1989年YATAIムーバブルーアーキテクチャー設計組と2位入賞。下/アトリエで「ASAMI」に明かりをともてくれた。



閉じるとライトが消えるブック型の照明器具「LIBRO DA COMODINOTI」。眠りにつく前、枕元で本を読む人は多い。毎夜、本を閉じライトを消すという動作を繰り返す。その2つの動作を一度にする、というアイデアを元にしたもの。遊び心が感じられるが開くと立ち上がるシェードなど、かなりテクニカルなデザイン。



天板中央に埋め込まれたつまみによって、片手でも持ち運べる小テーブル「BOON」NOVIKOS INTERNATIONAL社。掃除の時も楽。カップをのせてそのままサーブも。撮影/NANDO MUTAVELLI



*撮影 DAVID ZANARDI

「ミラノには生活に密着したデザインがある」

日本でデザイナーとして経験を積んでからの渡伊。仕事の進め方一つを取っても当然違うが、とりわけ企業の在り方がイタリアをデザイン王国にしているのだと指摘する。

「日本は合議制を尊重している国なので、プレゼンをするにしても誰もが納得するように持っていないかなくてはなりません。そこには、デザインが良い悪いと言えない人が少ないので、プロジェクト（商品開発案）のクオリティとは関係ないところで進んでいくんですね。日本の企業というのには、販売、マーケティング、技術開発まで育ってきたんだと思うんです。だから、デザインに対してクオリティを求められているわけではないし、逆にデザイナーが、クオリティをダウンしなければ、製品化にこぎ着けないことが出てくる。営業が力をもっているから、違う方向に

いってしまうことがよくあるんです。イタリアはどうかと言うと、プロジェクトを持つていく時は、決定権のある人例えば社長と直接話します。だから、その案の本質を評価される。それに、イタリアの企業はデザインがあつてこそ育つ、と考えている。だからまずはじめにデザインが重視されるんです。デザインがよくなるとは製品化はされない。その違い

「は大きいと思います」

日本のデザインは、「買わせるためのデザイン」と、理論のためのデザインとの二極に分化しているという。それはどちらとも、生活と直結していないところで生まれたデザイン、を意味する。

「イタリア、ヨーロッパといつても良いかもしれないけれど、ここでは現実の暮らしにベースを置いたデザインがあるから、みんな身近なところにデザインを意識している。国民の持っている美意識が違ふように感じますね。もちろん日本にも美しいものはたくさんあるけれど、それは日常とは違ふところにあるから、デザインがデザインとして独立してしまっているように思えるのです」

「コミュニケーションのツールとしてのプロダクトデザイン」

一人で仕事をしようようになってから今年で4年目に入った。サンタキアラの事務所からいきなり独立することはせずに、徐々に勤務時間を減らしつつ自身身の仕事を増やしていった。菺田さんの「無理をせず、できることをする」という姿勢は一貫している。

「これまで動てきた三つの会社やスタジオは、独立までの準備期間でもあったんです。自分がやりたいことを実現するための、ステップだった。それぞれの場

一人になった今、仕事は一層シビアである。デザインで何を発言したいのか、ダイレクトに問われるからだ。自分のやりたいことが選べる分、責任も当然重たくなる。

「一番気を使っているのは、オリジナリティです。過去に似たものがないか、自分の考えたことが誰かによって作られてはいないか、それをチェックするために雑誌をみているくらいです。二つ目は、発言する価値のあるものかどうか、人に見せる価値のあるものかどうか、自分の中で線を引き、ということなんです。

私は、形を与えるデザインというのは好きじゃない。スタイルを与えるのではなく、アイデアの中にスタイルをもっているデザインができればいいな、と。アプローチの仕方とディテール、技術的な解決法の3つのクオリティのバランスがとれているのが、いいデザインだと思ふんです」

菺田さんにとってプロダクトデザインは、用途のあるモノを作る。ことだけでなく、コミュニケーションのためのツールでもあるという。

「新しい発見をすると、誰でもそれを他の人にも伝えたい。文学や絵画や演劇で表現して他人に伝える人もいるけれど私の場合、その表現手段がプロダクトデザインなんです。その対象も日用品であることが多い。自分の発見や、感

動を伝えるために形になったもの（プロダクト）が、それを見たり使ったりする人の気持ちや暮らしを豊かにするようなそんな仕事がたくさんできたら、とてもうれしい」

ミラノに来て早8年が過ぎた。最初の2、3年は毎年、来年帰る」と言っていたさうだ。

「イタリアが特別好きだったわけでもないし、海外暮らしに慣れてやっていたわけでもなかったから、でも今は帰る時期を、いつ」と決めるのはやめました。日本での仕事はクオリティが違ふから、ここでの仕事をやめてしまうのはもったいないとも思ひ始めたし、仕事も増えてきたという現状を前向きに受けとめてやっています」

ここで得たものが日本でそのまま受け入れられるわけではないことも確信しています。デザインは社会と密着しているから、アトリエと違つて社会が変わればスタンスが変わつて当然なんです。だから、私の仕事はイタリアだと思つていきます。自分のやりたいことが今実現できているし、自分の目で見ていない日本の市場向けにデザインするのは難しい。100%自信をもてない仕事はできませんから」

「今、デザインすることが楽しい」と語つた笑顔に、現在の仕事の満足感、充実感を感じて自信があふれていた。

1999年10月1日(毎月1日発行)第13巻第10号(通巻145号)

Art of Living

Esquire

エスクァイア日本版

OCT. 1999 Vol.13 No.10

700yen

10

モダン家具と和みのとりあわせ、20件のショップガイド付き

東京イタリアン暮らし。

デザイン都市、

ミラノを旅する。

ミラノ建築遺産。／ヴィスコンティー族の文化遺産。
「ドムス」とイタリアンプロダクツの20世紀。

ミラノから訪ねる美食の旅。
郷土料理と食材、そしてワインを求めて。

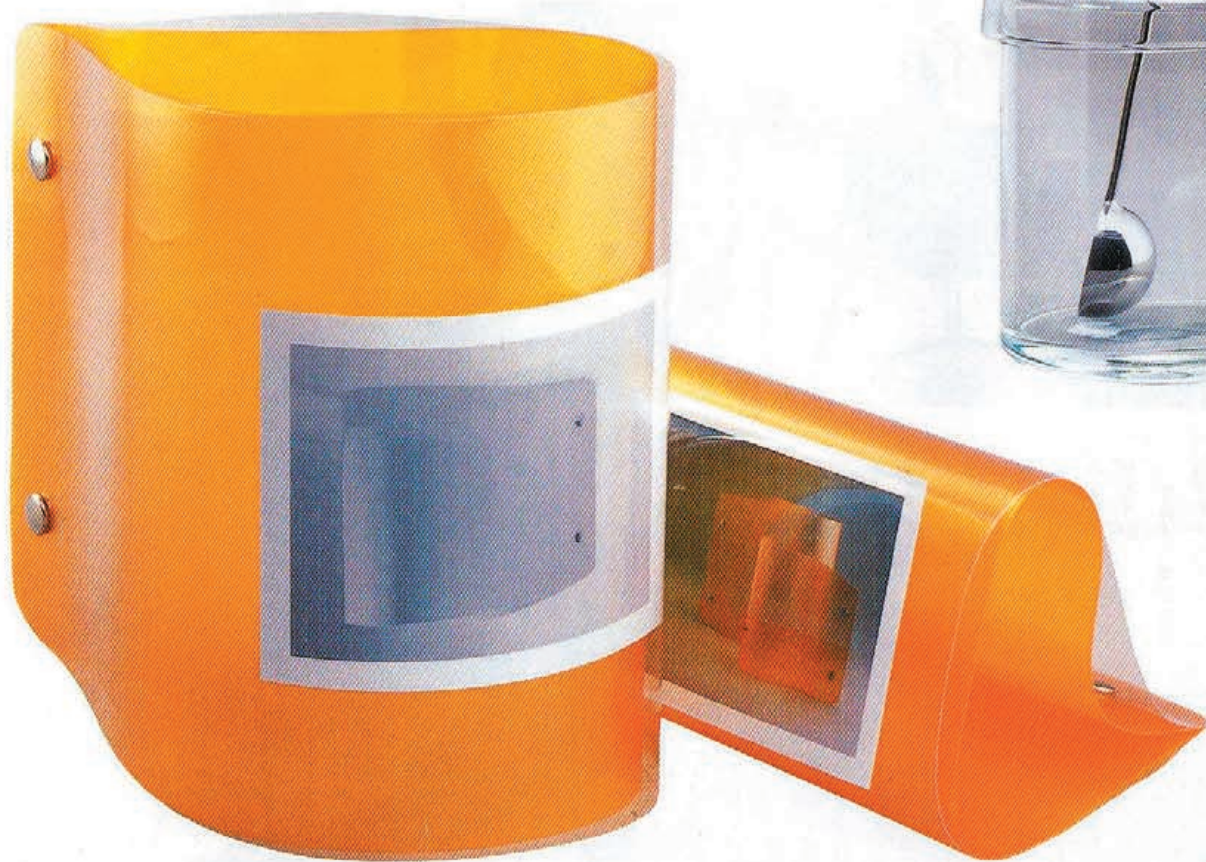
● 坂田和世



Kazuyo Komoda

PHOTOGENIA

フォトジェニア。透明Xカラー、2枚のプラスチックシートに写真を挟みスナップで留めただけのシンプルな写真立て。カーブさせて立てるところが、オリジナルだ。しかも、中に入れる写真自体は傷まないように工夫されている。27,000〜32,000リラ。Giorgio Pizzutti



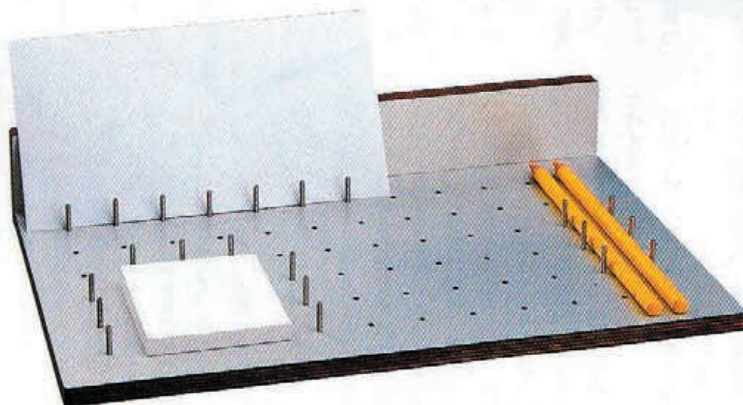
MIMI

ミミ。シュガーボットのスプーンははみ出るもの、と誰も疑っていなかった。ところがこんな解決法があったのである。シンプル、かつデザイン的に見事なプロジェクト。デザイナー自身が長期使用して、使い勝手を確かめたという作品。58,000リラ。Driade



ARIA

アリア。これが今年発表された、最新作のオブジェ・トレイXにガキ立て。使い手が上に何を置くかによって、穴の開いたボードにピンをはめ込んで作る自在なボード。こうした、わずかな参加も使い手を楽しませ、愛着を抱かせる。188,000リラ。Giorgio Pizzutti



「この国では誰よりも、 使い手が デザインを求めている」

ここにシンプルな構造のシュガーポットがある。しかしいつもと何かが違う……。

MIMIと名付けられたこの作品、スプーンの柄を外にはみ出させるのではなく、ガラス蓋のつまみの中に収納してしまったのだ。この発想の転換こそ、デザイナーにとっては得難い宝石の原石のようなものである。

MIMIはミラノ在住の日本人デザイナー、菺田和世、彼女自身の生活の中から生み出された。

日本で菺田氏は、企業の照明器具のデザイナーとしてスタートした。しかし、ひかりのクオリティを思考するのではなく、器具をデザインすることに根本的な矛盾を感じ始める。そこでさらに視野を広げ、空間、環境からデザインを考えよ



うと試み、ジ・エアー・デザインスタジオに入社。

彼女がミラノに渡ったのは、89年7月のことだった。あるイタリア人デザイナーのもとで、インテリア、プロダクト・デザインの仕事を始めるためである。日本のデザインの手法とは、全く異なったアプローチを持つ、独創的なデザイナーとのコラボレーションは、彼女にとって新たなデザインの地平を学ぶのに十分なものであった。その、あるイタリア人

とは、本特集でも紹介しているデニス・サンタキアラである。彼と、3年のデザインワークを経て以後独立。イタリアを中心に、ヨーロッパ、日本の一流メーカーとのプロダクトを手掛けて、現在に至っている。

話をMIMIに戻そう。シュガーポットの生い立ちはどうである。

「あるガラス工房を訪ねた時のこと。当初は製品化する意図もなく、MIMIの原形を作ってもらいました。そして、しばらくは自分で使用し、プロジェクトとしては寝かせていたのです。私にとって生活する空間は、こうして作品に大きく影響します。たとえば広いロフトで仕事をしていたら、テーブル小物は発想し難くなるんじゃないでしょうか。引越したら作品が変わるかも知れないですね……。さて、1年後でしようか、ドリアア社に行く機会があり、MIMIのポートフォリオをアートディレクターの方に見ていただくことができました。そして、結果的に頂いたのは、採用、という朗報だったのです」

このエピソードは、持ち込みのプ

ロジェクトにも分け隔てなく目を通して、その本質を見抜き、製品化までを決定する、というイタリアならではのオーナーの裁量の在り方がうかがえて興味深い。むしろ、それはデザインのクオリティと独創性が前提にあつてのことであるが……。

菺田氏の場合、このような経過によってプロジェクトが採用になった経験は、一度だけではないという。ところで、ミラノでのデザイン・ワークも今年で10年を経たわけだが、何が彼女をイタリアに引き止めているのだろうか。

「この国ではクライアントのみならず、誰よりも、使い手がデザインを求めているんです。言い換えれば、彼らは生活のクオリティとは何かを知っている、ということでしょうか。生活の身近な部分に良質のデザインを取り入れている。もう一方で、自

分の信じることにリスクを負えるクライアントやデザイナーが多く存在すること。これらが何より励みになつてきました。日本では、洒落たものがデザインと呼ばれています。そこには歴史的な文化の裏付けが欠けているように感じます。次は北欧だ、イタリアだという一過性のブー

ムがあり、消えてゆく。日本で、デザインがスタイルではなく、文化として根付くには、まだ時間が掛かるのではないのでしょうか」

彼女にとってデザインとは、単にものに洒落たかたちを与えることではない。日常生活の中で、何処にもなかったモノとふいに会った時の喜び。それを思索し、生きたかたちにして伝えようとしている。大人も子供も問わず、触れたひとの気持ちを豊かにできるもの。これこそデザインなのである。③



菺田和世

1961年東京生まれ。武蔵野美術短大工芸デザイン科卒業。日本でのデザイナー経験を経て、89年渡伊。スタジオ・サンタキアラに勤務後フリーランスとして独立。ドリアア、アチェルピス、ローゼンタールなど、ヨーロッパ一流メーカーとのプロダクトがある。

CREATORS* FILE -for LIVING-

ニッポンのクリエイター58人のしごと

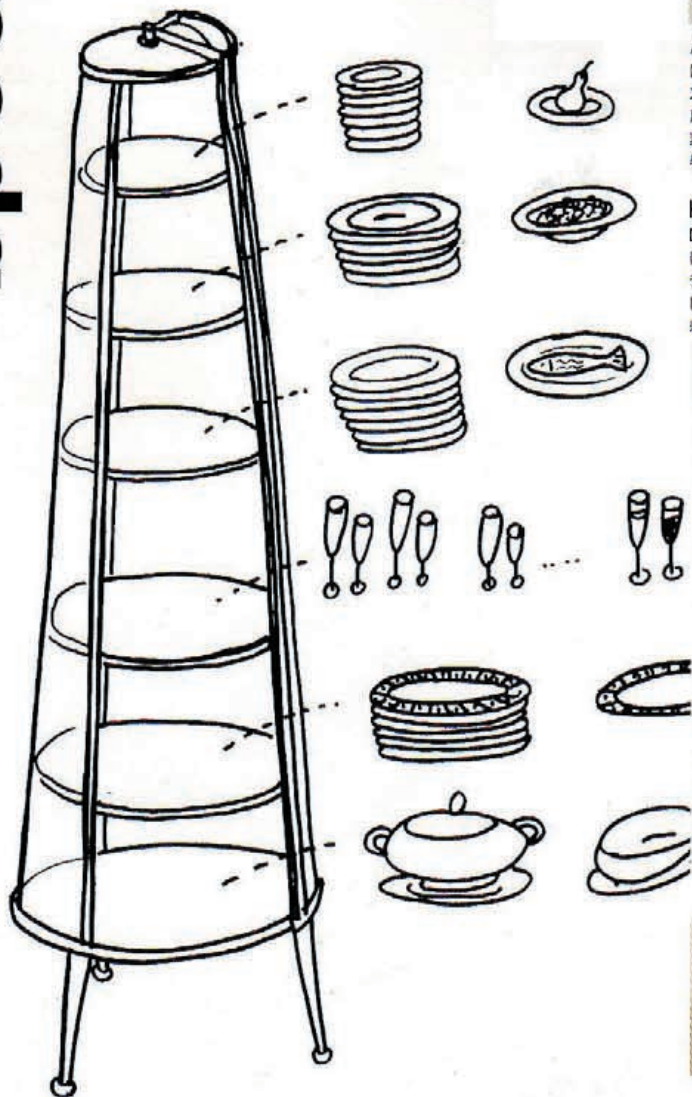
監修/萩原 修 立川裕大 ギャップ出版編集部 編

ギャップ出版

Kazuyo Komoda

菰田和世

デザインに限らず、
人を豊かにできるのは
普遍的な規則の発掘では
ないだろうか。



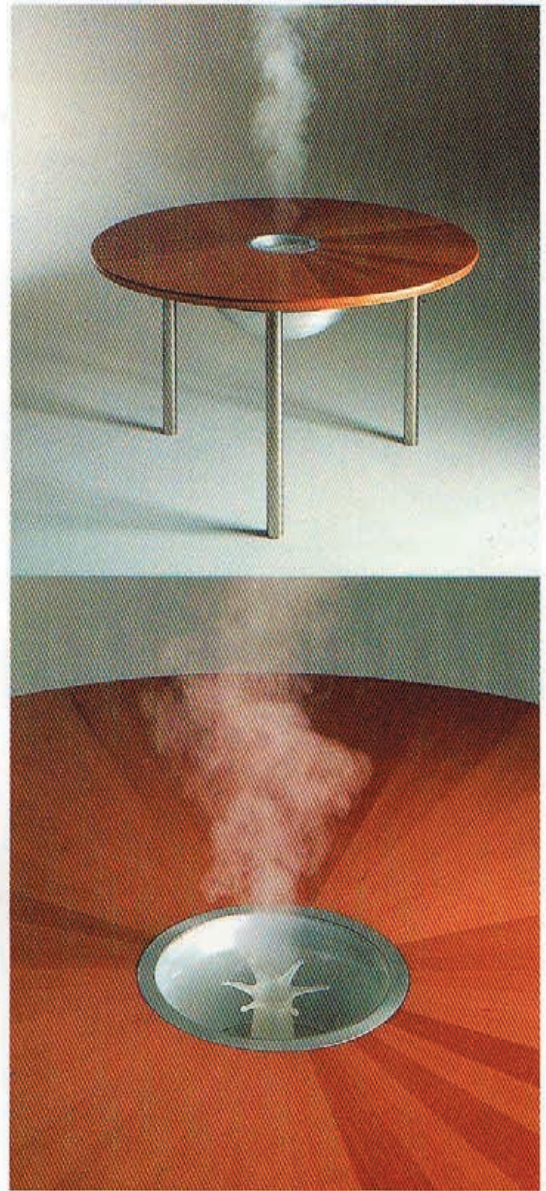
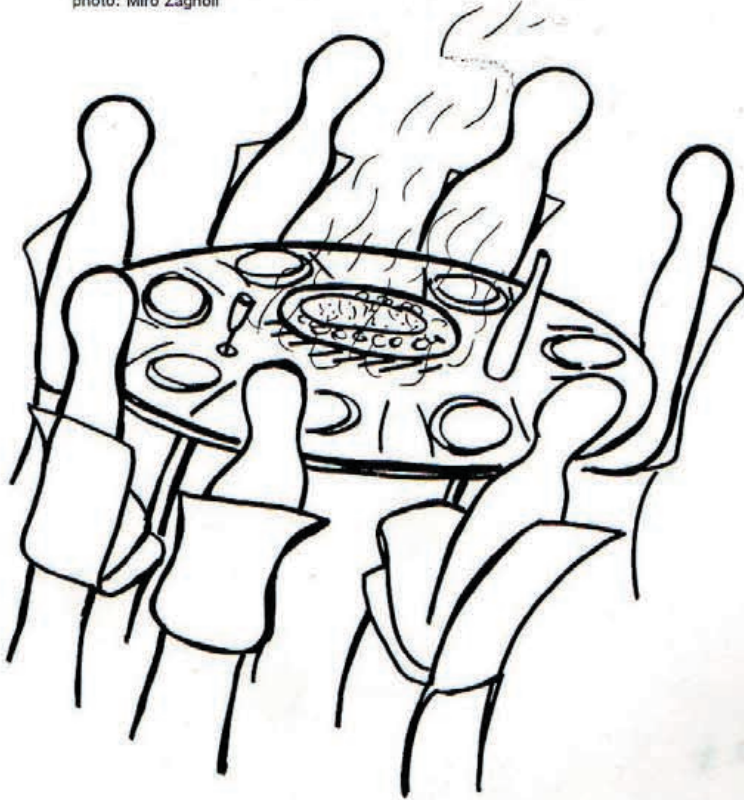
ASISAI (1998) ACERBIS INTERNATIONAL
【あじさい】 単一アールを与えたステンレスのパネ網をベースの穴に差し込み、その緊張から生まれる自然な曲線を利用した傘立て“ASISAI”では、作画的な造形を最小に抑え、素材の潜在的可能性を活かしながら、物と空間に互換性を与えることを試めている。 photo: Marino Ramazzotti

KASUMI (1994) BERNINI
【かすみ】 食器櫃“KASUMI”は、合理的に規格化された洋食器に合わせて網の寸法が決められ、そのため円錐台形のストラクチャーを持つ。曲面にはフレキシブルなポリカーボネートフィルムを使用し、製造上の簡略化と同時に視覚的な軽快感を持たせている。 photo: David Zanardi



GAYSA (1993) MODULAR

【ガイザー】 シンプルな木製の丸テーブル“GAYSA”の中央に埋め込まれたガラスのオブジェは、団らんの象徴のように蒸気を放つ。そして、上に置かれた大皿の料理を保温するという機能を持つ。食卓に集うことを大切にしている人のために。
photo: Miro Zagnoli



PHOTOGENIA (1996) GIORGIO PIZZUTTI

【フォトジェニア】 両端にスナップボタンの取り付けられた透明とカラー二枚の薄い平たんなプラスチックシート。スナップを止めると写真立てになるという“PHOTOGENIA”。形よりも素材よりも、アイデアにより物の価値が成立している。 photo: David Zanardi



GRUN (1998) OCEANO OLTRELUCE

【グルン】 一見梅雉そうに見える“GRUN”のランプシェードは、実は細長い長方形をぐるぐるんと二回巻き込んだものだけだ。シェードのポリカーボネートはごく淡い緑色のシルクスクリーンが施され、控えて暖かな光を放つ。
photo: Franco Capra



INNATURAL

international

MO.35

L'a vie en Rose

if I love you...Are you happy?



Zuccheriera MIMI'
L'anno di progettazione:1995
KAZUYO KOMODA
FOTO : DAVID ZANARDI



Portacandela JIGSAW
L'anno di progettazione:1996
KAZUYO KOMODA
FOTO : DAVID ZANARDI



Portacandela ASAMI
L'anno di progettazione:1993
KAZUYO KOMODA
FOTO : DAVID ZANARDI



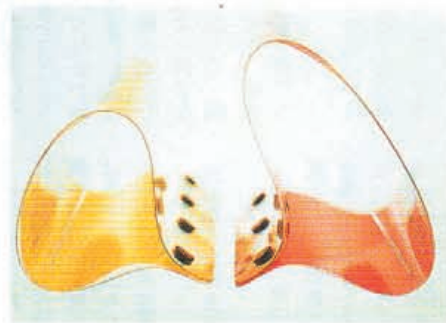
Portacandela Loto
L'anno di progettazione:1997
KAZUYO KOMODA
FOTO : DAVID ZANARDI



Portaombrelli ASISAI
L'anno di progettazione:1995
KAZUYO KOMODA
FOTO : DAVID ZANARDI



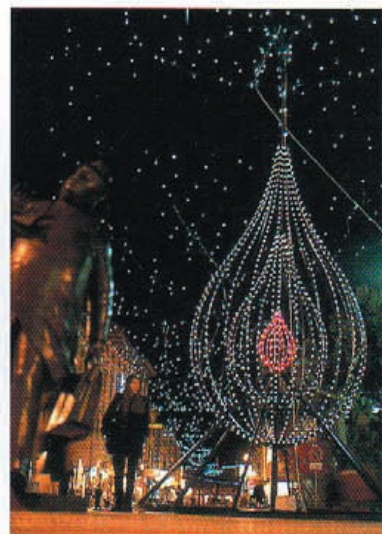
Portaritratto PHOTOGENIA
L'anno di progettazione:1995
KAZUYO KOMODA
FOTO : DAVID ZANARDI



KAZUYO 菰田和世

KOMODA

OUTERLINE FROM MILANO



LA FORMA DELL'ACQUA
PROGETTO MONTECATINI TERME 2000
KAZUYO KOMODA
FOTO : DAVID ZANARDI

孤田和世

【デザインする】とはどういうことか。イタリアでは「デザインする」という動詞 (disegnare) を非常によく使う。洋服や家具・住空間のデザインにはじまり、車や工業機械のデザイン、住空間や生活をデザインすることから、人生をデザインする、ある計画をデザインするとか、...というように全てがデザインされる。

デザインをするためにはそのモノに対する思い入れ、愛着、良い意味での執着が必要だ。イタリアにおいてデザインが世界的に知られる理由の一つに、イタリア人のモノに対する思い入れが事のほか強いことがあるように思う。そして、彼らの歴史の中で洗練されてきた美意識の高さもある。また、歴史的な職人技術(木工、鍛冶屋、左官、刺繍、ガラス細工、金工...)がイタリアデザインの高さの裏面を支えている。

日本のデザインが市場マーケティングを重視した販売計画から始まるとすれば、イタリアのそれはデザイナー独自のコンセプトを重視した【ゼロから始まる】デザインだ。

孤田和世はイタリアを中心に着実に独自のデザインを展開しているインテリア・プロダクトデザイナーである。イタリアのドリアダ社、アチエルピスインターナショナル社、ベルニーニ社やドイツのローゼンタール社、日本のヤマギワなどから

ら彼女がデザインしたモノたちが製品化されている。彼女はいう「イタリアはモノの存在価値がとても高い国です。政治などと同様、自分達を取り巻く環境のひとつとして、【社会性をもった】モノについてよく語られます。そしてなによりも、この国では、デザインが【文化】としてとらえられているのです。」
彼女は続ける。「デザインとはなにもカタチのあるものだけを対象とはしません。特に私が関心のあることは、【モノ】とそれを取り巻く【空間】、そしてそれを利用する【人】とのコミュニケーションです。カタチがなくて機能するモノをデザインすることができたら、すばらしくありませんか？ デザインの可能性は既存のモノのなか

にだけあります。問題をそれをどうやって引き出すかです。」
これまでの、彼女の仕事は照明器具やインテリア用品、小物などであったが、昨年の暮、トスカーナの小都市、モンテカティーニ・テルメ市の依頼で町のクリスマス用の照明デザインを手がけた。彼女の仕事は、温泉・飲泉が有名な人口2万5千人の町



LA FORMA DELL'ACQUA
PROGETTO MONTECATINI TERME 2000
KAZUYO KOMODA
FOTO : DAVID ZANARDI

の30数本の通りと主要広場のイルミネーションをデザインすることだった。温泉という町のアイデンティティを考慮し、水をテーマに【光の川】を町にひいた。利用された照明数1万個。彼女のデザインした都市における照明の効果は、町を散策する人々の流れを変えるまでに至った。

このプロジェクトの成功によって、同町の老舗ホテルが彼女に客室改造の仕事を依頼してきている。

孤田和世はモノを愛し、そのモノの存在理由を問い、そしてその価値をあげることを目指し実行しているデザイナーだ。今後の活躍がますます期待される。

伊藤格

孤田和世

東京生まれ。インテリア・プロダクトデザイナー。デザイン、家具、小物などのインテリアデザインを中心に、インテリア・プロダクト、ブランドコネクションまで活動範囲は多岐にわたる。ドリアダ社、アチエルピスインターナショナル社、ローゼンタール社などのヨーロッパ一流メーカーのプロジェクトがある。作品はDomus, Abitare, Casa Vogueなどのデザイン専門紙、イタリアの主要日刊紙、週刊誌に取り上げられるほか、日経アスキー、日経デザイン、アキタス、ブルータス、エスクワイヤー、クリエイターズファイル(GAP出版)、CASA MIA DECORなどに紹介されている。

Casa

Regali di Natale

Spaziali
new age
esotici
passionali
morbidi

Relax
Scegli
la tua
poltrona

Decorazioni
La casa delle oche



Ho perso l'aereo

Grazia e intelligente creatività caratterizzano gli oggetti disegnati dalla giapponese Kazuyo Komoda. Che spiega perché, arrivata dodici anni fa Milano, si è "dimenticata" di tornare a Tokyo

di Paola Biondi



Non pensava di fermarsi molto quando è arrivata a Milano. Era il 1989 e Kazuyo Komoda scendeva dalla scaletta dell'aereo con in tasca una laurea in Design presso l'Università delle Belle Arti di Tokyo e un secondo premio vinto a un concorso presieduto da Aldo Rossi. Poi ha cambiato idea e da questa città, «molto più umana di quella dove sono nata», non è partita più. Tutto è relativo. Senza troppi clamori, ma con determinazione tipicamente orientale, la designer giapponese si è ritagliata il proprio spazio nella realtà industriale di casa nostra. I suoi oggetti, ispirati alla cultura d'origine, si vestono d'ironia mediterranea. Tutti contengono un'emozione, un simbolo evocativo che strappa il sorriso. Ma non è divertimento fine a se stesso. A guardare bene, si scopre che dietro all'idea curiosa c'è anche una solida ragione d'essere legata a una precisa funzionalità. Così la **credenza a forma di cono per contenere piatti di qualunque diametro**, la lampada da comodino nascosta in un libro, il tavolo attrezzato per i bambini che ci giocano sotto, uniscono l'utile al dilettevole.

«In Italia il design è molto più presente nella vita quotidiana di quanto non lo sia in Giappone», dice Kazuyo. «La fantasia qui trova spazio, ciò che poteva restare solo un bel disegno si traduce invece, grazie ad aziende disposte a crederci, in oggetto d'uso. Per questo mi piace lavorare qui». Kazuyo Komoda ha progettato per Driade, Acerbis International, Dornbracht, Bernini, Domodamica, ma è impegnata anche come consulente di tendenza per colori e materiali, ha partecipato a mostre internazionali, ha tenuto conferenze. Ed è un'entusiasta. Forse non a caso il comune di Montecatini Terme ha affidato proprio a lei il progetto di illuminazione e arredo urbano per i "fuochi d'artificio": quelli per festeggiare il prossimo Capodanno.



In alto, Kazuyo Komoda. Qui sopra, la Tavola Imbandita, attrezzata per il gioco dei bambini. A lato, credenza Kasumi disegnata nel 1994 per Bernini. A sinistra, in alto, divano Amarillide per DNA, con braccioli a cinghie di cotone intrecciate. In basso, lampada a forma di libro; si accende quando il volume viene aperto.



CREATORS*

FILE

2

-for living- vol.

クリエイターズ・ファイル・フォー・リビング2

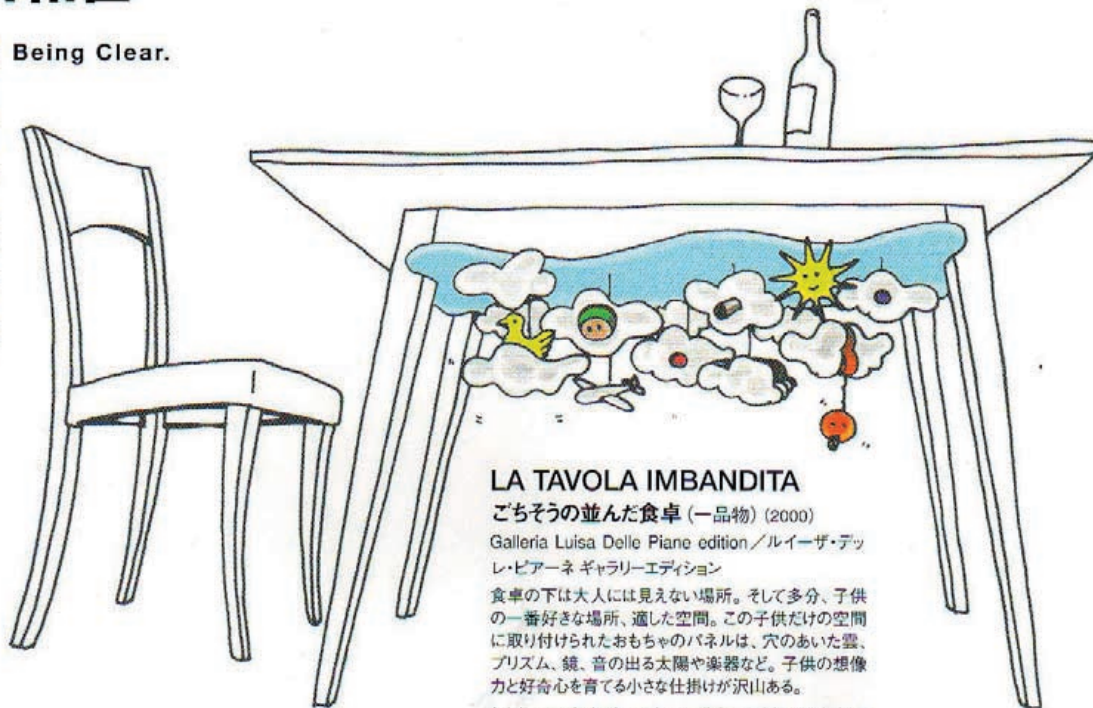
監修/萩原 修 立川裕大 ギャップ出版編集部 編

Kazuyo Komoda

菰田和世

Being Clear.

「クリアーであること。」



LA TAVOLA IMBANDITA

ごちそうの並んだ食卓 (一品物) (2000)

Galleria Luisa Delle Piane edition / ルイーザ・デッレ・ピアーネ ギャラリーエディション

食卓の下は大人には見えない場所。そして多分、子供の一番好きな場所、適した空間。この子供だけの空間に取り付けられたおもちゃのパネルは、穴のあいた雲、プリズム、鏡、音の出る太陽や楽器など。子供の想像力と好奇心を育てる小さな仕掛けが沢山ある。

Adults rarely look under a dining table, so it is a suitable and comfortable place for children. Panels fixed to the underneath, including clouds, a prism, mirrors, sounding sun and small instruments are gadget-like toys that encourage their imagination and curiosity. (one-off)

photo: David Zanardi





**PROGETTO
MONTECATINI TERME 2000
"LA FORMA DELL'ACQUA"**

モンテカティーニ・テルメ2000年プロジェクト
「水のかたち」(1999-2000)

イタリア、トスカーナ地方の、飲泉保養地として知られるモンテカティーニ・テルメ市のための西暦2000年を祝うインスタレーションのプロジェクトは町シンボルともいえる「水」をテーマにしている。そして、その「流れ」により未来を投影する。

The lighting installation for the celebration of 2000 in Montecatini Terme, a town known for a spa in Italy. The theme of this project is Aqua, and the stream reflects the future.
photo: David Zanardi



VERSO

ヴェルノ (2000)

シンプルなスタイルのソファ・ヴェルノは両端のアームを回転させると、各側一人ずつ、二人分のポストを増やす事ができる。シンプルなアイデア。奥行き70センチのシートはラフな姿勢で自由に座れ、来客用ベッドにもなる。

This is a simple sofa with arms that swivel. The spacious 70cm-deep seat can be turn into a bigger sofa or a bed.
photo: Miro Zagnoll

